

モード Mode Mode は語る

中野 香織

時代の変化 映す象徴

スポーツ庁の鈴木大地長官が昨秋、国民の健康促進を目的にスニーカーでの通勤を奨励して以来、スーツにスニーカーの組み合わせをめぐる議論が増えた。

この組み合わせは、2012年ごろからストリートで散見されていた。モード界においても、高まる一方のラグジュアリースニーカーブームを受け、15年ごろには、ファッションウィークなどに来る男性たちの間では珍しくなくなっていた。日本のビジネスウエアにもようやくこの波が訪れたかとの感がある。長官の提案は通勤時の運動のためということなので、文脈は異なるかもしれない。

20世紀までは学校の先生以外には許さ

スーツにスニーカー

れなかった組み合わせを、魅力的に着こなすにはコツがある。これまでと同じスーツのまま足元だけスニーカーに替えるわけではないのである。スーツに関しては、フォーマル度の低い服地や細めのトラウザーズなどの若干スポーティーなタイプを着ること。運動靴感覚が薄めの、清潔感あるスニーカーを選ぶこと。従来の堅いビジネスウエアが少しドレスダウンし、ITやスタートアップ界の標準服であるカジュアルウエアをドレスアップしたような、ほどよい中間点に落ち着き、風通しのよい時代感覚が漂うとき、好感度が高くなるように見える。

服装には絶対不変の決まりはなく、常



スーツにスニーカーで登庁する鈴木スポーツ庁長官（東京・霞が関）

に時代の要請と人々の感覚が落ち着くところで新しい服装（costume）の慣習（custom）が生まれてきた。現在のビジネススーツの起源は、近代資本主義社会の始まりと切っても切れない関係にある。貴族と新興ブルジョワが、階級差に煩わされることなく仕事や社交を進めるため、ドレスコードにのっとったスーツのシステムが普及。スーツは市民社会を地ならしする役割を果たした。

時代を先導する業界の標準服がジーンズやスニーカーであり、老舗のパナソニックも変化を求めてジーンズやスニーカーでの勤務を解禁したことを思うと、その名目が「健康のため」であったとしても、スーツにスニーカーという新旧折衷スタイルを、後代の服飾史研究家は、社会が次の時代に移行する過渡期の象徴と見るだろう。（服飾史家）